
ご主人様と猫。 猫とベッド

鍵屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「主人様と猫。 猫とベッド

【NZコード】

N9802Q

【作者名】

鍵屋

【あらすじ】

訳あり猫と、俺様で変態なご主人様の、ちょっとアブノーマルな就寝タイム。

(前書き)

当方の「ご主人様と猫。 猫とティータイム」の続編的物語です。お読みになつていないと理解出来ない点もあるかと思われます。
よろしければそちらを読んでから、ご覧いただけると嬉しいです。

昼間たくさん寝ても、夜になれば自然と眠氣は襲つてくるものなのです。

あくびをしつつ、寝支度を終えベッドにと向かいます。

「遅かつたね、みー」

そこにはなぜか、既にご主人様がいました。
思わず立ちどまり、理由が理解出来なくて首を傾げます。
そこはアタシのベッドなはずです。

「みー」

自分の隣をぽんぽんと叩きながら、『ご主人様は笑顔で再度アタシを呼びます。

ああ、あの笑顔をする時は逆らわるのが一番なのです。
恐る恐るベッドに近付いて乗つかって、ご主人様を見つめます。

「なんで俺がここにいるか分かつてないって顔をしてるね。
昼間自分が何をしたか、思い出してみたらどう?」

……昼間、ですか？

昼間は確かに、『主人様が外出されたのでお屋敷の中を探検したのです。

無駄に立派なお屋敷の中は、やっぱり無駄に豪華だったのです。

で、その途中で熊さんにありました。

大きな身体におひげのお顔、つぶらな瞳はお歌の中の熊さんそのものだつたのです！

あるう日い、森のお中あ、熊さんにい、でああつた。……出合つたのはお屋敷の中でしたが。

とにかく、アタシは熊さんにぐつついて厨房について、そこでアイスをいただいたのです。甘くつておいしかったのです。ほっぺた落ちるかと思いました。

そんなアタシに、内緒だよともうひとつアイスをくださいました、探検のお供にアイスが増えたのです。

「みー、思い出した？」

そこまで思い出したといひで『主人様から声がかかりました。が、無視です。

アタシの小さな脳みそでは一度にたくさんのこととを処理できないのですよ。

ええっと、アイスをお供に探検を再開したのですよ。

それでとっても素敵なベッドを発見しました、そこで昼寝をしてしまったのです。

当然起きた時にはアイスは姿を消しておりまして、ふにゃふにゃになつたコーンだけがアタシの手元にあつたのです。

ミステリーですね。

うんうんと頷くアタシとは対象的に、『主人様はどこかイライラした様子です。

ダメですよ、カルシウム不足は身体と心に悪いのです。

「シーツだけでなく、マットレスまでクリーニングする必要があるんだって」

……ナンノコトナリショウ。

「あのベッドはサイズが特注な上に俺の身体硬さも合わせてあるんだよね。

新調するよりはクリーニングの方が早いし安くつくといつてこんなつたんだけど……」

嫌な予感がして、ベッドの上で後退ります。ですがすぐにつかまれ、それも阻まれました。

『主人様、あなたは人でなしですか。

「なんないたいけなアタシをこじめるだなんて。

「一週間」

はい？

「ベッドが使えるようになるまでにかかる期間。
その間俺はこのベッドで休むことにするね」

もつと意味がわからないです！

というか、手を離してくださいっ！

「暴れるな、みー」

それは無理な相談ですっ！

だけど抵抗は無駄で、アタシはこの主人様の腕の中につっぱり取ります。

のしかかるような格好はこの主事様の体温を直に感じられて、トクトクと伝わる心音が眠りを誘うのです。

.....。

はつ。つこいつひとじりしまいました。

アタシとしたことが！

「睡眠はしつかりしたものを短くというのが、うちの祖父の格言でね」

はあ、「ご主人様のお祖父様の格言ですか。確かに素敵な眠りは最高なのです。それはわかります。

ですがですね、それがアタシと一緒に寝ることにつながるのか理解出来ないですよ！」

「だから合わないベッドで休む気にはなれない。客用で一番俺に合うのがこのベッドなんだよね」

「だったらアタシが別のところで休むですよー。アタシはどうでも寝れるのが特技なんです！」

「とはいって普段使っているベッドには到底敵わない。そこで思つたのが、小動物による癒し効果。

そういう訳だから、俺のベッドを使い物にならなくした罰として大人しく抱き枕になつて」

んなつ！ なんと横暴な！

アタシは小動物は小動物でも、大人しく主人に従う？犬？ではな

く？猫？なのです！

それを主張するためにご主人様の顔を睨みつけたら　寝息をたてて寝てやがります。

アタシもびっくりな寝つきの良さですよ。

「……今日だけ、だから……」

ベッドをダメにしたのはアタシなのです。なので今日は引いてあげるのです。

決して、ご主人様の温もりが心地よいとか、そんな理由じやないのですとも！　ええ！

ご主人様の肩に頭を預ける体勢で、そのままアタシは眠りにつきます。

木々に囲まれたこのお屋敷は夏の夜でも涼しくて、くつづいて寝ても暑苦しくないのが救いです。

(後書き)

で、ベッドで一緒に寝るのがテンプレとなるわけです。
時系列的には「猫とティータイム」よりは前の話ですが、「ご主人様と猫」第一段です。

楽しんでいただけたのなら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9802q/>

ご主人様と猫。 猫とベッド

2011年9月11日13時59分発行